【室内気候】

		温熱環境	温熱指標	6温熱要素とは、気温・放射温度・湿度・気流、さらに代謝量・着衣量 ×2
		温熱環境	温熱指標	新有効温度(ET*)とは、6温熱要素より求めた温度で、湿度50%と仮定した場合の温度で示される
		温熱環境	温熱指標	SET*が22.2~25.6℃の場合、温冷感は「快適、許容出来る」の範囲である ×2
		温熱環境	温熱指標	PMVとは室内の温熱感覚に関する指標、気温・放射熱・湿度・風速・代謝・着衣量を考慮したもの
		温熱環境	温熱指標	PMVとは、人体の熱負荷に基づき、熱的中立に近い状態の人体の温冷感を示す
		温熱環境	温冷感覚	床暖房の表面温度の上限は30℃程度、低温やけどの防止の為
		温熱環境	温冷感覚	放射の不均一性とは放射温度の差で表され、冷たい空気では10℃以内、天井では5℃以内とする必要あり ×2
		温熱環境	温冷感覚	全身温冷感が中立状態にあっても、局所温冷感に係わる不快要因があると、快適な状態とはならない
		温熱環境	温冷感覚	気流の乱れが強いと、平均風速が低くても不快を感じることがある
		温熱環境	温冷感覚	室内の上下温度差において、椅座位の場合、くるぶし(床上0.1m)から頭(1.1m)までの気温差は3℃以内が望ましい ×2
		温熱環境	温冷感覚	冬期において窓ガラス付近で冷却された空気が下降する現象はコールドドラフトと呼ばれる
		温熱環境	人体からの発熱量	成人の単位体表面あたりの代謝量は、58.2W/m2程度
		温熱環境	人体からの発熱量	総発熱量は顕熱発熱と潜熱発熱の和、顕熱発熱は体温上昇、潜熱発熱は発汗蒸発による
		温熱環境	人体からの発熱量	標準的な体格の成人の椅座における発熱量は100W/人程度(代謝量は58.2W/m2程度)
		温熱環境	人体からの発熱量	代謝量が増えるにつれ(作業が重くなるにつれ)、潜熱発熱の割合が上昇する
		温熱環境	温熱要素	着衣による断熱性能(温熱要素)の単位はclo(クロ)
		温熱環境	温熱要素	気流の乱れの強さが大きいと、平均風速が低くても不快に感じることがある
		温熱環境	温熱要素	平均放射温度は、グローブ温度・空気温度・気流速度より求められる
		温熱環境	温熱要素	作用温度は、乾球温度・気流・平均放射温度・周壁面温度・体表面積より算定(湿度は無関係)
		温熱環境	温熱要素	グローブ温度計はつや消し黒の無発熱球の放射と対流による平衡温度を測定するもの
		空気汚染	汚染物質	汚染物質の許容量、浮遊粉塵量は0.15mg/m3以下
		空気汚染	汚染物質	揮発性有機化合物(VOC)は、シックビルディング症候群の原因となることがある

【換気・通風】

		自然換気	温度差換気	外気温が室内温度よりも高いときは、中生帯よりも上側の開口から外気が侵入する
		自然換気	温度差換気	暖房時に温度差換気を行うと、中性帯よりも下側が換気経路の上流(給気側)になる
		自然換気	温度差換気	建物内の空気密度の差は、煙突効果を発生させる要因となる(=重力換気)
		自然換気	内外圧力差	温度差換気において上下に大きさの異なる窓がある場合は、大きな開口部の方が圧力差は小さい
		自然換気	内外圧力差	上下に大きさの異なる窓がある場合、流入・流出量は両窓ともに等しい
		自然換気	開口部流量	開口部の有効面積と、開口部内外の圧力差の平方根に比例する
		自然換気	開口部流量	建物内の温度差や建物周囲の風圧力を考慮して、換気口等の大きさを検討する
		自然換気	流量係数	通常の窓ではO.6~O.7程度、開口部が滑らかに縮小するベルマウスでは1.0に近づく
		自然換気	温度分布	放熱器などを熱損失の大きい窓付近に設けると、室内の温度分布の偏りを少なくする
		自然換気	温度分布	住宅の断熱性能を高めることにより、室内上下の温度差は小さくなる
		自然換気	風力換気	換気量は、外部風向と開口条件が一定ならば外部風速に比例する
		自然換気	風力換気	風上側と風下側の両窓の面積が等しく、位置も向かい合っている場合が最も換気量が多くなる
		自然換気	風力換気	内外圧力差が2倍になると、通過風量は√2倍となる
		換気量	必要換気量	室内の汚染物質の発生量を汚染物質の許容値と外気の汚染物質濃度の差で除したもの
		換気量	室内絶対湿度	室容積が小さいほど・換気回数が少ないほど、室内絶対湿度は高くなる
		換気量	全般換気	室全体の空気を入れ替えることにより、汚染物質の希釈・拡散・排出を行う換気方式
		換気量	排気	排気口の位置は、室内における汚染物質の濃度分布に影響を与える
		換気量	燃焼器機	密閉型燃焼器機においては、室内空気を燃焼用として用いてはならない
		換気量	燃焼機器	密閉型暖房機器は、燃焼による室内の空気汚染のおそれが少ない
		換気量	燃焼器機	半密閉型燃焼機器は室内の空気を燃焼に用い、排気は排気筒によって行う方式
		換気量	不完全燃焼	酸素濃度が19%程度以下になると不完全燃焼が始まり、18%以下で不完全燃焼による一酸化炭素の発生が増加
		機械換気	換気法	第一種換気法により居室ごとに個別換気を行う場合は、扉にアンダーカットやガラリは不要
		機械換気	換気法	第一種換気法は吸排気を機械で行うので、室内圧の気圧の制御(正圧・負圧)を行うことが可能
		機械換気	換気法	第二種換気法は、機械給気により室内圧を正圧に保つので、クリーンルーム等に適した換気法
		機械換気	換気法	第二種換気は室内側が正圧となり、汚染空気の室内への流入を防ぐことができる
		機械換気	換気法	第三種換気法(排気を機械で行う)においては、気密性が低い建物においては給気口からの安定的な給気が行えない
		機械換気	換気法	厨房においては、排気量>給気量とする(第3種換気法)
		機械換気	換気法	JISによるクリーンルームの空気洗浄度の等級はクラス1~9があり、クラス1が最も洗浄度が高い

			1001-1-17	⊞+n+n =	
	Ш	Ш	機械換気	置換換気	室内設定温度よりも低温の空気を室下部より流入させ、室内の発熱を利用して空気を循環させる換気法
			機械換気	置換換気	設定温度よりもやや低い温度の室下部より流入させ、汚染物質を室上部から排出させる換気法
			機械換気	気密化	気密化を図ると、必要換気量を安定的に確保し換気経路が明確化される
			機械換気	換気システム	24時間換気システムを採用する場合には、住戸全体が0.5回/hの換気回数を確保し、各室まんべんなく換気すること
			機械換気	汚染物質	シックハウスの対策として、使用する材料に留意する以外にも、換気を行うことも有効
			機械換気	汚染物質	シックハウス症候群の原因とされる物質には、害虫駆除等で用いられる有機リン系殺虫剤も含まれる
			機械換気	フィルタ	粉塵除去用のエアフィルタの粒子捕集率の測定法には、計数法・比色法・質量法の表示方法がある
			機械換気	空気齢	室内に流入した新鮮空気が室内のある点までに達するのに要する時間(新鮮空気の提供量に関する指標) ×2
			機械換気	空気齢	室内のある点における空気の新鮮度を示す換気効率に関する指標、値が小さいほどその点の空気の新鮮度が高い
			機械換気	空気余命	室内のある点から排気口に達するまでの時間
			機械換気	ハイブリッド換気	自然換気の省エネルギー性と機械換気の安定性を両立させた換気法

【伝熱・結露】

		伝熱と結露	総合熱伝達率	対流熱伝達率と放射熱伝達率を合計したもの
		伝熱と結露	対流伝達	対流熱伝達率では、表面積が大きい粗面ほど、風速が大きいほど値が大きくなる
		伝熱と結露	対流伝達	壁体の表面付近では層流、表面から離れた所では乱流が生じる
		伝熱と結露	熱伝導率	一般の材料ではかさ比重大きくなるほど熱伝導率は大きくなるが、グラスウールは逆に小さくなる
		伝熱と結露	熱伝達率	壁体近傍の風速が大きいほど、大きくなる
		伝熱と結露	熱伝達率	発泡性の断熱材において、空隙率が同じ場合、材料内部の区報面積の寸法が小さいものほど熱伝導率は小さくなる
		伝熱と結露	熱伝達率	断熱材に水分が含まれると熱伝導率が上昇し、断熱性能が低下する
		伝熱と結露	中空層の伝熱	複層ガラスは中空層に乾燥空気を注入したもので、断熱効果が高い
		伝熱と結露	中空層の伝熱	二重窓(半密閉)においてはガラス相互の間隔が3cm以内では間隔の増加で熱抵抗が急増、それ以上では熱抵抗の増加は無い
		伝熱と結露	熱貫流抵抗	単体ガラスでは、室内側の熱伝達抵抗+ガラスの熱伝導抵抗+屋外側熱伝達抵抗、熱伝導抵抗の値が最も小さい
		伝熱と結露	熱貫流抵抗	内外表面の熱伝達率も考慮するため、材厚が2倍になっても熱貫流抵抗は2倍にはならない ×2
		伝熱と結露	断熱性能	性能を高めることにより室温と室内表面温度の差を小さくする、室内上下の温度差も小さくできる
		伝熱と結露	断熱性能	冬季の暖房室において、室内気温が同じであっても断熱性能が低いと人体からの熱損失は増す
		伝熱と結露	断熱性能	熱線吸収板ガラスは日射熱の侵入を防ぐ効果があるが、冬期の断熱効果は透明板ガラスと同程度 ×2
		伝熱と結露	断熱性能	外壁に面する隅角部の室内表面温度は、平面壁部分よりも外気温に近づく
		伝熱と結露	皇容縣	暖房停止後の室温降下では、熱容量が同じであっても建築物の断熱性の良否により室温変化は異なる
		伝熱と結露	皇容縣	熱容量が大きな建物ほど、室温の変動は緩慢になる
		結露	表面結露	壁体表面付近の空気の露点温度と壁体表面温度との関係により生じる(差が大きいほど危険)
		結露	表面結露	屋外に接した北側の非暖房室は結露しやすい
		結露	表面結露	換気を行うと室内の絶対湿度が下がるので、表面結露の防止に有効
		結露	表面結露	熱橋部分の室内側は表面結露が発生しやすい
		結露	表面結露	結露防止において、冬季における窓付近の結露防止にカーテンは逆効果
		結露	内部結露	屋根の防湿においては、断熱材の外気側に通気層を設けると内部結露の防止となる
		結露	内部結露	二重サッシの間の結露を防止するためには、室内側のサッシの気密性を高める
		結露	内部結露	繊維系の断熱材を用いた外壁の壁体内結露を防止するためには、断熱材の室内側に防湿層を設けることが有効
		結露	熱橋	ヒートブリッジ(熱橋)部分付近の室内気温は、外気温度に近くなる

【日照・日射】

		日射	日射熱	建築物の日射熱取得は、直達日射・天空放射・地表面からの反射・高温物体からの再放射の合計
		日射	ルーバー	南向き窓面に設置した水平ルーバーは、日射・日照調整に有効 ×2
		日射	ルーバー	西向き窓面に設置する縦型ルーバーは、日照・日射調整に有効
		日射	ライトシェルフ	採光窓付近に取り付けられた反射材、室の奥まで昼光を導くことが可能で室内照度の均斉度を高める
		日射	光ダクト	ダクト内部に反射率の高い素材を用いて、採光部から目的空間まで自然光を運ぶ装置
		日射	日射遮蔽係数	厚さ3mmの普通ガラスの日射熱取得量を基準とし、実際に使用するガラス窓の日射熱取得量の比
		日射	日射遮蔽係数	値が大きいほど、日射熱取得量が大きい
		日射	日射取得率	「ガラスに入射した日射量」に対する「室内通過日射量+(窓に吸収された日射のうち室内に再放熱されたもの)」の割合
		日射	夜間放射	地表から大気への放射と大気から地表への放射の差、曇天時夜間放射は雲が多い・雲が低いほど少なくなる ×2
		日射	反射	塗装の色にかかわらず赤外線に対する表面の反射率は吸収率に比べて非常に小さくなる(金属成分を含まない塗装の場合)
		日射	放熱	屋上緑化の土壌は、水分の蒸発による冷却効果も有する
		日照	直射日光色温度	直射日光の色温度は、日の出:3200K、日没:2500~2800K、午前・午後:5000K、正午:5500~5800K
		日照	可照時間	北緯35においては、南向き鉛直壁面では、夏至7時間程度、冬至9時間40分程度、春秋分で12時間程度
		日照	日照時間	実際に直達日射が照射した時間数
		日照	水平面日差し曲線	年間の水平面の日差し曲線を1枚にまとめたもの、逆日影曲線図とも
		日照	日影図	真太陽時の影の方向を測定することにより、真北を求めることが可能
		日照	日照図表	冬至などの特定に日における対象となる建物が検討点に及ぼす日影の影響を示したもの
		日照	等時間日影図	日影時間の等しい点を結んだものを等時間日影図という
		日照	等時間日影図	東西に長い建物ほど4時間日影の面積は大きくなる(高さよりも東西長さの方が日影時間への影響が大きい)
		日照	島日影	東西に2つの建築物が並んだ場合に、それらの建物から離れた位置に生じる
		日照	終日日影	夏至の日の終日日影は、1年中日影

[採光・照明] 註:設備分野の「照明」を含む

		光と視覚	可視光線	可視光線の波長範囲は380~780nm
		光と視覚	比視感度	555nm (黄緑色近傍) が比視感度が最も高い、赤色では黄緑色の0.2倍程度
		光と視覚	比視感度	明所視においては黄緑近傍、暗所視では青緑近傍の視感度が最も高くなる
		光と視覚	分光透過率	光の波長ごとの透過率、可視光線の波長域に比べて、赤外線の長波長域の方が小さい
		光の単位	光束	ある面を単位時間に通過する光の放射エネルギーの量を視感度で補正した値 X3
		光の単位	光束	光源の明るさを表す指標、単位はルーメン(lm)
		光の単位	光度	点光源から特定の方向に出射する単位立体角当たりの光束
		光の単位	照度	単位面積当たりの入射光束、その場の明るさを示す(照明が当たっているものの明るさを示す) ×2
		光の単位	光束発散度	光源・反射面・透過面から発散する単位時間あたりの光束 ×2
		光の単位	輝度	光源・反射面・透過面から特定の方向に出射する単位面積当たり・単位立体角当たりの光束
		光の単位	輝度	見る方向から光の発散面の明るさを評価する測光量、光源のみならず反射面・透過面での定義も可能 X2
		光の単位	輝度	点光源から均等拡散面上の受照点へ向かう光度を2倍にすると、受照点を望む輝度も2倍となる
		光の単位	輝度	屋内照明器具による不快グレアの評価に用いられる
		光の単位	輝度	均等拡散面上における輝度は照度と反射率との積に比例する ×2
		採光	採光計画	採光計画(昼光率・設計用照度等)においては、直接光は対象とせず、天空光を対象とする
		採光	設計用照度	設計用全天空照度では、快晴時1000k程度、特に明るい日 (薄曇) で5000k (快晴時の5倍)
		採光	天空比	全天空の立体角に対する、ある地点から見える天空の立体角の比
		採光	昼光率	全天空照度に対する室内観測点照度の百分率(%)
		採光	昼光率	窓と室内観測点の位置関係のみならず、室内表面の反射率や窓外の建築物などの影響も考慮する ×2
		採光	昼光率	学校の普通教室の昼光率は2%程度必要
		採光	昼光率	窓を大きく・位置を高く、ガラスの透過率を高くする等は、昼光率を向上させる ×2
		採光	昼光率	直接光と間接光の両者の影響を考慮する、昼光率二直接昼光率+間接昼光率 ×2
		採光	昼光率	全天空照度に関わらず一定の値となる
		採光	昼光率	受照点に対する窓面の立体角投射率により値は変化する
		採光	立体角投射率	光源面の形状によらず算定可能
		採光	照度分布	室内における照度の分布を示したもの
		採光	照度分布	側窓採光の場合、窓の位置が低い方が室内床面の照度分布は不均一となる
		採光	均斉度	片側採光の室における照度の均斉度は、1/10以下とすることが望ましい

	1	
□ □ □ □ □ 採光	均斉度	透明なガラスを用いるよりも、拡散性が高いガラスを用いるほうが均斉度は高まる ×3
□□□□□□□明視	視認性	注視している対象がはっきり見えるか否かの属性、視対象と背景色の明度差の影響を大きく受ける
	グレア	まぶしさ、視野内に極端な高輝度の光源がある場合に生じる
□ □ □ □ 明視	グレア	あくまで現象の名称であり、高輝度を発生させる光源に対する名称ではない
	モデリング	視対象物に光を当てた場合の陰影による立体感や質感を表現する際の光源の能力、光源種により立体感・質感は異なる ×3
□□□□□明視	演色性	色温度が同じ光源であっても視対象物等の差異等により演色性は異なる
□ □ □ □ 明視	演色性	光源の分光分布の影響を受ける、同じ物体でも異なる分光分布で見え方が異なる
	演色性	病院の手術室・診察室においては、事務所などの照明よりも、演色性の高いものを採用する ×2
□□□□□明視	演色評価数	基準の光の下における物体色の見え方からのずれをもとにした数値
□□□□□□明視	平均演色評価数	白色LEDランプは70~80(演色評価が高い)、水銀ランプは40~50 ×2
	人工照明	光源色の評価は、色温度・平均演色係数・色度等によって行う
	照明種類	白色LEDの光源効率(光束/消費電力)は20lm/W程度、白熱電灯で18lm/W(あまり変わらない)
	照明種類	白色LEDの色温度は6500K程度、昼光色蛍光ランプも同程度
	照明種類	白色LEDの寿命は30,000時間程度、蛍光ランプの寿命は6,000~12,000時間程度
	照明種類	水銀ランプの色温度は4,100K程度、白熱電球の色温度は2,850K程度
	照明種類	ナトリウムランプのランプ効率は130~180lm/Wと比較的高い
	照明種類	白色LEDの光源効率(光束/消費電力)は20lm/W程度、白熱電灯で18lm/W(あまり変わらない)
	照明種類	LED(白色以外)の発光効率は40~90lm/W程度、Hf蛍光ランプ(100lm/W)に比べて平均ランプ効率は低い
	照明種類	白色LEDの色温度は6500K程度、昼光色蛍光ランプも同程度
	照明種類	白色LEDの寿命は30,000時間程度、蛍光ランプの寿命は6,000~12,000時間程度
	照明種類	白色LEDの平均演色評価数は80程度、水銀ランプは45程度
	照明種類	水銀ランプの色温度は4,100K程度、白熱電球の色温度は2,850K程度
	照明種類	Hfランプとは従来の蛍光灯の始動性や放電の安定性を改良したもの、発光効率が高い
	照明種類	白熱電球は蛍光ランプに比べ、気温変動による光束の変動が少ない
	照明種類	高圧ナトリウムランプは、白熱電球に比べてランプ効率は高いが演色性は低い
	照明種類	色温度は、昼光色蛍光灯ランプ>昼白色蛍光ランプ>白熱電球の順で高い
	照明種類	蛍光ランプは周囲温度が25℃程度のときに最大光束に達するように設計されていることが一般的
	照明器具	製造年が古い照明器具の安定器にはPCBを含有するものがあるので、廃棄の際には留意
	照明照度	点光源による直接照度は、光源からの距離の2乗に反比例する

		照明計画	照度基準	JISの照度基準は、特に指定がない限り床上85cmの位置における水平面を対象としている
		照明計画	照度基準	JISの照度基準は、特に指定がない限り床上85cmの位置における水平面を対象としている
		照明計画	照明率	室指数(室の開口・奥行き・光源距離で決定)により照明率は変化する(室面積が同じでも部屋の形により照明率は異なる)
		照明計画	消費係数	照明エネルギー消費係数は、年間照明消費エネルギー量を年間仮想照明消費エネルギー量で除した値、小さいほど効率良 ×2
		照明計画	光束法	照明率に影響を及ぼす要素には、室指数・室内反射率・照明器具の配光は含まれるが、保守率は含まれない
		照明計画	照度分布	全般照明と局部照明を併用する場合、全般照明の照度は局部照明の1/10以上とすることが望ましい ×2
		照明計画	配光曲線	照明器具の中心を原点として光源の光度を極座標に示したもの X2
		照明計画	ルーバー	照明設備にルーバーを設置すると間接光となり照度が落ちるので、必要な照明消費エネルギーは増える
		照明計画	保守率	ある期間使用後の作業面の平均照度を、器機設置直後の平均照度で除したもの
		照明計画	保守率	照明器具の最新の状態に対する現在の性能の維持状態の比を表す指標、経年劣化やほこりなどによる効率低下にも配慮
		照明計画	制御	スケジュール制御とは、一定期間で設定したスケジュールをもとに、点滅・調光を行う制御方法
		照明計画	制御	初期照度補正制御とは、新品の照明機器のオーバースペックな照度を調整して節電を行う制御
		照明計画	制御	適性照度維持制御(初期補正と同じ)の有無を比較すると、ランプ清掃の直前での照度差が最も小さい(新品の際の差が最も大)

【色彩】

		混色	混色	減法混色とは、混ぜ合わせる程に明度が低くなる混色、元のどの色よりも暗くなる ×2
		混色	混色	加法混色において無彩色となる2つの色は、互いに補色の関係にある
		色彩	マンセル表色系	マンセル表色系では、色相・明度/彩度の順に色の三要素が示される ×2
		色彩	マンセル表色系	明度は、マンセル表色系ではバリュー(Value)として表記される
		色彩	マンセル表色系	マンセル表色系では、7.5YR 7/5よりも7.5YR 6/5とされる色のほうが暗い
		色彩	マンセル表色系	マンセル表色系において、彩度の最大値は色相・明度により異なる
		色彩	XYZ表色系	XYZ表色系におけるxy色度図上においては、xの値が大きいほど赤が強く、yの値が大きいほど緑が強くなる傾向にある
		色彩	XYZ表色系	XYZ表色系における3つの刺激値のうち、Yは光源色の場合、光束等の測光量に対応している
		色彩	XYZ表色系	XYZ表色系における2つの色の加法混色の結果は、xy色度図上の2つの色の位置を結んだ直線上に表示される
		色彩	表色系	JISの物体色の有彩色系統色名は、基本色名に有彩色の明度・彩度の修飾語と色相の修飾語を付けて表す
		色彩	色彩表現	色調(トーン)とは、明度と彩度とを組み合わせた概念であり、「明るい」「濃い」等の修飾語で表現される
		色彩効果	進出・後退	進出色とは、周囲よりも飛び出して見える色で、暖色や高明度色が該当する
		色彩効果	面積効果	小さい色見本を用いて使用して視感による測色を行う場合には、測色対象の面積を大きくしすぎないことに留意
		色彩効果	面積効果	同じ色でも色見本(面積小)で見るよりも、実際に壁に塗った方(面積大)が高明度・高彩度に見える ×2
		色彩効果	誘目性	色の誘目性とは目を引きやすいか否かの指標であり、彩度の高い色は誘目性が高い ×2
		色彩効果	誘目性	色相においては背景色によって各色の誘目性は異なる
		色彩効果	恒常性	照明の照度や演色性が少々変化しても、その光が一様に物体に当たっていれば、物体の色を同じ色に認識できる
		色彩効果	同化現象	囲まれた色・挟まれた色が、その周囲の色に近づいて見える現象を同化と呼ぶ
		色彩効果	色彩感覚	異なる物体色を持つ物体でも、それらを照明する光の種類によって同じ色に見えることがある
		色彩効果	色彩感覚	小面積の高彩度色を大面積の低彩度色に対比させて用いるとアクセント効果を得ることができる
		色彩効果	色彩感覚	照度が低い場合には色温度が低い色(赤などの暖色系)が好まれる、照度が高い場合は色温度が高い色が好まれる
		色彩効果	色彩感覚	全波長を均等に反射する物体を太陽光のもとで見ると、その物体の反射率が高いほど太陽光の色に近い白色に見える
		色彩調整	表色系	JISの安全色の一般事項における「青」は指示および安全である
		色彩調整	表色系	JISにおいて色材を一般材料とする場合、安全色は赤・黄赤・黄・緑・青・赤紫、対比色は白・黒
		色彩調整	高齢者の色覚	高齢者では特に低照度の際に、色彩の分別能力が低下する

【音響・振動】

		音の属性	音の属性	音の三要素とは、音の大きさ・音の高低・音色
		音の属性	音の属性	感覚量は刺激のべき乗に比例($E=kllpha$)する、スティーブンスのべき乗の法則
		音の属性	音の属性	人の音に対する間隔量は、音圧の対数に比例する(ウェーバー・フェヒナーの法則)
		音の属性	音の属性	可聴周波数はおおよそ20~20,000Hz、対応する波長の範囲は十数mm~十数m程度
		音の属性	音の属性	音圧レベルの等しい純音を聞いた場合、1,000Hzの方が100Hzよりも大きく聞こえる(等感度曲線) ×2
		音の属性	音の強さレベル	音圧の実効値が等しい2つの音を合成した場合の合成音圧は√2倍となる
		音の属性	音の強さレベル	音の強さのレベルを20dB下げるためには、音の強さを1/100にする
		音の属性	聴感覚	マスキング効果とは、同種の他の刺激の存在により対象刺激の最小知覚閾が上昇する現象(知覚閾上昇=聞きづらくなる)
		音の属性	聴感覚	カクテルパーティー効果とは、まわりが喧騒でも特定の音のみを聞き取ることができる能力のこと
		騒音	騒音	A特性音圧レベルとは、人体の聴感補正を加えた音のレベルであり、音の大きさの感覚に対応する
		騒音	透過騒音レベル	人体の聴感補正された音の時間平均値、変動する騒音の評価に用いる
		騒音	騒音環境基準	住居用の地域においては、昼間は55dB以下、夜間は45dB以下とされるのが一般的
		騒音	騒音許容値	スタジオの許容値は、NC-20程度
		防音と遮音	距離減衰	反射音がない空間において、点音源からの距離が1mから4mに変化すると音圧レベルは12dB低下する
		防音と遮音	透過損失	直接入射条件の透過損失は、壁の面密度と入射音の周波数の積で求められる
		防音と遮音	透過損失	TL (透過損失) =10log10(入射音エネルギー/透過音エネルギー)
		防音と遮音	透過損失	壁の単位面積当たりの質量が大きいほど壁の透過損失は大きい(質量則) ×2
		防音と遮音	透過損失	複層ガラスはその面密度の合計と等しい単板ガラスに比べて、中低音域において遮音性能が低下する
		防音と遮音	質量則	面密度が高いほど、周波数が高いほど遮音性能は高い(透過損失が大きい) ×2
		防音と遮音	遮音性能	吸音率が高くても遮音性能が高いとは限らない(むしろ吸音率が高い方が遮音性能が低い場合が多い)
		防音と遮音	遮音性能	複層ガラスでは、コインシデンス効果により同じ面密度の単層ガラスよりも低周波数領域で遮音瀬能が低下する
		防音と遮音	遮音等級	界壁における(室間)遮音等級に関するD値は、値が大きいほど遮音性能が高い(透過損失で評価するから)
		防音と遮音	遮音等級	Dr-55はDr-40に比べて、空気音の遮断性能が高い
		防音と遮音	遮音等級	床衝撃音遮音性能に関するL値は、値が小さいほど遮音性能が高い(透過してしまった音のレベルで評価するから)
		吸音	吸音機構	孔あき板を用いた吸音構造では、孔と背後空気が共鳴を起こして音のエネルギーを吸収する
		吸音	吸音機構	中空二重壁の共鳴透過において、空気層を熱くすると共振周波数は低くなる
		吸音	吸音機構	多孔質材料と剛壁面との間の空気層を厚さを増すと中・低音域の吸音率が上昇する
		吸音	吸音率	壁に入射する音のエネルギーに対する、透過音のエネルギーと壁に吸収された音のエネルギーの比 ×2

		吸音	吸音率	入射音が一定ならば、吸音率が高いほど反射音のエネルギーは小さい
		吸音	吸音率	壁の吸音率は、入射する音の周波数により値は異なる
		吸音	吸音率	音源が同一ならば、平均吸音率の高い部屋のほうが、室内の平均音圧レベルは低くなる
		吸音	吸音材料	天井付近に吸音材料を設置すると、残響時間は短くなる、明瞭度も向上する
		吸音	吸音材料	天井付近に吸音材料を設置すると、室内で音を発した場合に室内の平均音圧レベルは小さくなる
		吸音	吸音材料	天井付近に吸音材料を設置すると、隣室で音を放射した場合の室間音圧レベル差は大きくなる
		吸音	吸音材料	多孔質材料は、その表面を通気性の低い材料で被覆すると、高温域の吸音率が低下する
		吸音	残響時間	室容積が大きいほど、室内の透過吸音面積が小さいほど残響時間は長くなる(セービンの残響式)
		吸音	残響時間	コンサートホールの最適残響時間は、室容積が大きいほど長くなる
		吸音	残響時間	平均音響エネルギーが1/106(60dB)低下するまでの時間、室容積が小さいほど・聴衆が少ないほど短い
		吸音	ホール	シューボックス型は奥行きの深い長方形の平面に高い天井を有する形状
		吸音	音響設計	サウンドスケープとは音の排除のみならず、音を生み出したり・音に意識を向ける事等により良質な音環境を提案すること
		吸音	特異現象	フラッターエコーとは、平行な2つの反射面の間に、反射音が繰り返し留まる現象